

没後100年 “スクリャービンの世界”

プログラム

今年、後期ロマン派の最も個性的な作曲家、スクリャービンの没後100年に当たります。そこで今日は、スクリャービンの独創的な世界へご案内します。スクリャービンは1872年ロシアのモスクワ生まれで、ラフマニノフより一つ歳上。モスクワ音楽院の同期生で同じように優れたピアニストだった事も共通していますが、ラフマニノフが生涯ロシア・ロマン派を受け継いで行ったのに対し、スクリャービンの作風はある時期を境に大きく変わって行きます。初期の作風はショパンの影響を受けたピアノ曲が多くを占めましたが、1900年以降、神智学や神秘主義思想へ傾倒して行き、通常の和声法から逸脱した「神秘和音」を活用し、神秘性の強い音楽を目指して行きました。練習曲や前奏曲はショパンの作品にあやかっただけのものですが、練習曲作品8の第12番は力強くドラマティック、前奏曲作品37の第1番は神秘的な魅惑に満ちた名曲です。ピアノ・ソナタは第2番が“南国の海の幻想”と“嵐の海の幻想”を表現した印象派的な作品なのに対し、第7番は“神秘和音”を多用して大胆な変貌を遂げた代表的な作品です。唯一のピアノ協奏曲はしなやかでヴィルトゥオーソ的なピアノ、ロシア特有の哀愁等、美しさに満ち溢れた名作にも拘わらず、今日演奏頻度や録音で不遇に扱われているピアノ協奏曲の一つです。5曲ある交響曲のうち、第2番はその後の交響曲には見られない若々しさと輝かしさを持った佳曲なのに対し、第3番は神智学への傾倒がはっきりと現われてきた頃の作品で量感たっぷりの響きに魅了されます。第4番はスクリャービンの目指した独自の音楽思考が見事に結実した作品で、「神秘和音」と色彩感、官能性を持つスクリャービンの代表作となった傑作です。ごゆっくりお楽しみください。

アレクサンドル・スクリャービン (1872.1.6~1915.4.27): ピアノ・ソナタ第2番嬰ト短調op.19 “幻想ソナタ”

ユジャ・ワン (ピアノ)

(2013.4.17 トッパンホールでのLive)

ピアノ協奏曲嬰ハ短調op.20~抜粋

ウラディーミル・アシユケナージ (ピアノ)

ロリン・マゼール指揮ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団 (1971年録音 ロンドン盤)

交響曲第2番ハ短調op.29~第5楽章

ロマン・コフマン指揮ザールブリュッケン放送交響楽団

(1996.4.12 ザールブリュッケン、コングレスザールでのLive)

*** 休憩 ***

交響曲第3番ハ長調op.43 “神聖な詩” ~第3楽章

佐渡 裕指揮イタリア国立放送交響楽団

(2004.11.4 トリノ、ジヨヴァンニ・アニエリホールでのLive)

練習曲第12番嬰ニ短調op.8-12

モーラ・リンパニー (ピアノ)

(1990年録音 EMI盤)

前奏曲第1番変ロ短調op.37-1

ピアノ・ソナタ第7番op.64 “白ミサ”

アルカディ・ヴォロドス (ピアノ)

(2009.3.1 ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive)

交響曲第4番op.54 “法悦の詩”

クラウディオ・アバード指揮チエコ・フィルハーモニー管弦楽団

(1971.8.4 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)